

令和4年度 第65回 関東高等学校サッカー大会 大会総評

報告者：高体連技術部員 南稜高校 横山晃一

5月28～30日までの3日間で第65回関東高等学校サッカー大会が神奈川県で開催された。

大会は各都県予選1位の8チームをAグループ、2位の8チームをBグループとし、それぞれトーナメント方式で実施された。Aグループの1位を優勝、2位を準優勝とし、準決勝で敗退した2チーム及びBグループの1位を3位とする規定がある。埼玉県からは県予選の結果、Aグループに正智深谷高校、Bグループに武南高校が出場した。今回は埼玉県勢の試合と、Aグループ決勝の試合を中心に大会を振り返らせていただくことにしたい。

正智深谷は初日に宇都宮短大附属高校（栃木県）と対戦し、0-2で初戦敗退となった。正智深谷は序盤からパスワークで相手を揺さぶりながら、サイドから崩しにかかる場面が増える。奪われても攻撃から守備への切り替えの早さで失った地点での奪い返しに成功して攻撃の手を緩めない正智深谷に対し、宇都宮短期大学附属はゴール前で体を張って止める時間帯が続く。正智深谷は宇都宮短大附属を相手陣内へ押し込みながらペナルティーエリア内へ幾度も進入してシュート場面を作り出すものの、ゴールラインを割れずにいると、逆に宇都宮短期大学附属は跳ね返したボールに対して前線からのプレスを仕掛けてボールを奪取し、ショートパスから流れるようなカウンターで先制点を挙げる。その後も宇都宮短期大学附属は守備時に1-5-4-1でブロックを組む陣形でゴールを固く守りつつ、ボールを奪うと正智深谷の背後のスペースへのランニングで素早い攻めからサイドを崩して追加点を奪う。後半はお互いに早いタイミングでロングボールをFWに入れて攻める形をとる。正智深谷がボールを保持し始めるが、宇都宮短期大学附属はDFラインを上げ下げし、守備陣形をコンパクトに保ち、正智深谷に攻撃のリズムを作らせない。正智深谷はサイドを起点に攻めて、相手ゴール前の人数を減らそうとするが、宇都宮短期大学附属は5バックで対応するためサイドでの数的優位がなかなかつけれない状況が続く。試合はそのまま宇都宮短期大学附属が正智深谷の攻撃に耐えて勝利した。

武南高校は初日に韮崎高校（山梨県）と対戦して延長戦の末に3-2で勝利をおさめたが、続く2日目で前橋育英高校（群馬県）の前に0-3のスコアで2回戦敗退となった。

1回戦、武南高校は1-4-2-3-1、韮崎高校は1-4-4-2のシステムでスタート。立ち上がりから、互いに前線の選手へシンプルにロングボールを配球し、セカンドボールの回収によって攻撃のリズムを作り出そうとする。徐々に武南がボールを保持する時間が増え、MF中央3人がショートパスを繋ぎながらリズムを作って崩しにかかる。飲水後から武南は細かいパスワークの中央突破に加えてサイド攻撃を織り交ぜ、多彩な攻撃を展開し始める。韮崎の組織的な粘り強い守備に苦戦していた武南ではあったが、32分にPKを獲得すると、これをしっかりと決めて先制に成功する。その後もMF⑩松原がFKを直接決めて2点目をあげ、前半を終えた。後半も武南が主導権を握りながら、韮崎が両CBを中心とした組織的な守備で対応する状況が続く。韮崎が守備で耐えながらチャンスをうかがうなか、CKからこぼれ球を押し込んで反撃の狼煙をあげる。勢いを得た韮崎は競り合いと球際の強さを発揮し、ボールを奪ったらサイドを起点に手数をかけずに武南のゴール前に迫っていく。すると韮崎は再びCKからこぼれ球をFW⑩鷺見バーネットが決め同点とする。韮崎は交代を上手く使いながら、守備の強度を下げずに武南に対してプレッシャーをかけ続け、相手SBの背後を取り、ミドルサードでボールを回収し、積極的なドリブルの仕掛けからクロスを供給するが、得点には至らず延長戦に突入する。延長8分、拮抗した状況の中、武南MF⑥

齋藤が一瞬の間をつきドリブルで抜け出し豪快なミドルシュートを決め、3-2とする。その後、一進一退の攻防が続いたが、武南が逃げ切って2回戦進出を決めた。

2回戦の前橋育英戦。序盤武南は初戦同様のシステムで、ドリブルとショートパスのコンビネーションで相手ゴールに向かっていく。対する前橋育英はボールを左右に振り分けながら、縦パスで攻撃のスイッチを入れて一気にゴール前に入ろうとする。球際で強度の高いボディコンタクトが続き、ミドルサードで一進一退の攻防が続く。この状況に対して武南は少しずつミドルサードを経由しないロングボールを使い始めるが、前橋育英DFラインのチャレンジ&カバーの質が高く、最後のところは自由にさせてもらえない。すると18分、武南DFラインの足が一瞬止まった所を見逃さず、左SB⑥福永の質の高いピンポイントのクロスに素早く反応したMF⑪齋藤がヘディングで合わせて前橋育英が先制に成功する。武南はロングボールを使い始めたことで、周囲の関わり方が遅くなり、前線での二次攻撃に繋がらず、本来の持ち味であるショートパスに影響が出てくる。前橋育英は相手のロングボールを弾き返した後のセカンドボールを難なく回収し、攻撃回数を増やす。後半、武南はロングボールを控え、ショートパス主体のスタイルに戻すとリズムを掴み、ペナルティーエリアに進入しチャンスを作り始める。流れが武南に傾き始めた所であったが、前橋育英はシンプルなロングボールの競り合いを制して追加点をあげることに成功する。武南は中盤の選手が流動的に動いてボールを保持し、前橋育英に的を絞らせないように攻める。前橋育英はDFラインをコンパクトにして、武南の縦パスが入る瞬間に連動してプレスをかける形で攻撃を封じ込める。守備からリズムを作った前橋育英がボール奪取からショートカウンターで3点目をとる。武南の攻撃スタイルや変化に対して落ち着いた対応を見せた前橋育英が勝利した。

Aグループ決勝は前述した宇都宮短大附属を2-0で退けた桐光学園高校(神奈川県)と明秀日立高校(茨城県)の顔合わせとなった。前線の組み合わせを変えながら決勝まで勝ち進んだ桐光学園は1-3-4-2-1、対する明秀日立は1-4-4-2でキックオフ。明秀日立はボールを奪ったらFW⑨熊崎、⑰石橋をターゲットに縦に速く攻めるスタイル。桐光学園は中盤もこなせるCB⑤豊田を中心に3バックから丁寧にショートパスを繋ぎアタッキングサードに迫る。攻守の切り替えの早さで上回る桐光学園が徐々に主導権を握りボールを保持し始め、FW⑱金岡、MF⑧野頼へ縦パスが入るようになるが、明秀日立が球際の強さを発揮し、最終ラインを突破させない。明秀日立は飲水後から守備戦術を変更し、相手3バックに厳しくプレッシャーをかけることを徹底。それが功を奏し、高い位置でボール奪取した明秀日立が先制し、前半を終える。後半も組織的な連動した守備からリズムを作る明秀日立が得点を重ね、3-0とする。桐光学園はMF⑦ベイリーを投入し、1-4-2-3-1にシステムを変更し、前線から積極的にプレッシャーをかけ、素早い攻守の切り替えから1点を返す。桐光学園は、ボランチを経由したポジションでリズムを作ろうとするが、連戦においても明秀日立の守備の強度と集中力が落ちずに桐光学園に自由を与えない。そしてミドルサードでのボール奪取から決定的な4点目を得る。明秀日立は、3日間の連戦を、強度の高い守備から素早く相手ゴールに迫るプレーを終始徹底し、関東大会初優勝を遂げた。

本県代表の2チームはいずれも十分なボール保持力を持ち、攻撃面において他県代表とも対等以上に渡り合える水準であった。しかし、上位進出したチームと比較すると守備攻撃面ともにゴール前でのプレー強度と精度においては現時点で差があるという印象を受けた。「ゴールを奪う」「ゴールを奪わせない」というサッカーの根幹にフォーカスしてレベルアップを試みてもらいたい。今後高体連主催のトーナメント形式の大会としてはインターハイと選手権が控えている。県内での切磋琢磨を経てこの2大会こそは本県代表の躍進に期待したい。